

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 夏 思洋

論 文 題 目

Synchronic and Diachronic Aspects of Floating Quantifiers  
in English

(英語における遊離数量詞の共時的通時的諸相)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 滝川 睦

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

本論文は、英語における遊離数量詞、すなわちそれが修飾する名詞句から離れた位置に現れる数量詞(e.g. The students have all finished the assignment.)の共時的・通時的諸相を生成文法理論の枠組みにおいて説明しようとしたものである。第1章では、遊離数量詞に関する研究史を概観しつつ、現代英語における遊離数量詞の基本的特性を紹介するとともに、本論文の議論にとって重要となる位相と多重一致という生成文法における最新理論の概念を導入している。第2章では、遊離数量詞に関する残置分析を破棄した上で、副詞分析と照応分析を融合する形で、遊離数量詞は照応性を持つ副詞であると主張している。そして、照応形束縛に関する多重一致を用いた Chomsky (2008)の分析を拡張し、遊離数量詞はそれが修飾する名詞句とともに目標子として、探査子の機能範疇と多重一致関係を結ぶことにより、素性照合を受け認可されるとする条件を提案している。この条件に基づき、現代英語における他動詞構文、非対格構文、受動構文などの様々な構文において、主語と遊離数量詞が探査子である時制と多重一致関係を結ぶと分析している。また、一般に目的語指向の遊離数量詞は許されないが (e.g. \* I saw the men all.)、遊離数量詞がそれを認可する動詞の探査領域内にないため排除されると説明している。一方、代名詞目的語の場合には遊離数量詞が許されるという事実については(e.g. I saw them all.)、動詞句の上位にある機能範疇が代名詞目的語の移動を駆動し、それが探査子として遊離数量詞を認可すると主張している。

第3章では、歴史コーパスを用いて初期英語における主語指向の遊離数量詞の分布を調査し、動詞の種類にかかわらず、18世紀までは遊離数量詞が動詞に後続する語順が可能であったことを観察している。そして、その語順の消失は、18世紀中に動詞移動が消失したことに起因すると主張している。第4章では、目的語指向の遊離数量詞の歴史的発達について調査を行い、初期中英語までは目的語が数量詞に先行する語順が可能であったことを発見している。当該時期に目的語移動が利用可能であったとする先行研究に基づき、遊離数量詞が目的語とともに、目的語移動を駆動する機能範疇と多重一致関係を結ぶことにより認可されるという分析を提示している。また、代名詞目的語と結びつく現代英語と同じタイプの遊離数量詞が初期近代英語に出現したが、その事実を目的語転移の利用可能性に関連付けて説明している。第5章では、受動構文における遊離数量詞の分布の変化を調査し、18世紀までは遊離数量詞が受動分詞に後続する語順が可能であったことを観察している。初期英語において受動分詞が主語と形態的に一致していたという事実を踏まえて、主語、遊離数量詞、受動分詞が時制と動詞の間にある機能範疇と多重一致関係を結び、その位置に受動分詞が移動することができたため、そのような語順が許されていたと主張している。

第6章では、本論文の内容の総括、本論文の理論的・経験的貢献を述べるとともに、今後の遊離数量詞に関する研究動向を展望している。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

現代英語における遊離数量詞については、生成文法理論の初期から多くの研究の蓄積があるにもかかわらず、その統語構造や認可に関して意見の一致を見ていない。また、遊離数量詞の通時的側面を扱った研究は数少なく、その歴史的発達の全体像は必ずしも明らかではない。本論文は、英語における遊離数量詞の共時的・通時的側面を生成文法理論の枠組みにおいて論じた本格的な研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、歴史コーパスを用いた丹念な調査により、遊離数量詞の歴史的発達の全体像を明らかにしたことが挙げられる。第3章から第5章において、初期英語では現代英語よりも遊離数量詞の分布が自由であり、主語指向の遊離数量詞が動詞に後続する位置に現れたこと、さらに目的語指向の遊離数量詞が可能であったことなどの言語事実を発見した。また、代名詞目的語のデータを注意深く観察し、代名詞目的語と結びつく遊離数量詞は初期中英語に一旦消失したが、現代英語と同じタイプの遊離数量詞が初期近代英語に出現したことを実証した。これらの調査により遊離数量詞の歴史的発達の全体像を明らかにしたことは、言語事実の発掘という経験的領域における歴史言語学に対する大きな貢献である。さらに、現代英語に至る段階で遊離数量詞の分布が制限されるようになったという言語変化を、動詞移動や目的語移動の消失という、遊離数量詞とは独立した要因に関連付けて説明しているため、非常に説得力のある議論になっている。

第二に、生成文法の最新理論における位相と多重一致を用いた遊離数量詞の認可条件を提案し、その共時的・通時的諸相に統一的説明を与えたことが挙げられる。もともと多重一致は形態的一致現象を捉えるために考案されたものであるが、近年では照応形束縛などの統語関係の説明にも援用されている。本論文で提案された多重一致に基づく遊離数量詞の認可条件もこのような研究動向に合致しており、多重一致の有用性を高めたことは生成文法に対する理論的貢献であると言える。さらに、その認可条件が現代英語の遊離数量詞だけでなく、その歴史的発達の説明も射程としていることは高く評価されるべきである。

しかし、本論文の考察に問題がないわけではない。遊離数量詞が照応性を持つ副詞であるという主張の根拠が十分ではない、遊離数量詞を認可する探査子と素性照合を行う機能範疇が一致しない場合がある、複数の章で仮定されている遊離数量詞を認可する機能範疇の正体が必ずしも明らかではないなどの問題がある。しかし、これらの問題は今後の研究によって克服可能であり、丹念な資料調査に基づく遊離数量詞に関する共時的・通時的研究である本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。